



コラム

有識者の目から見た安全・安心まちづくり（21）

夏休みに入り、子どもたちが戸外で過ごすことが多い時期となりました。

そこで、今回は、「交通環境における子どもの行動特性をふまえた交通安全対策」について研究しておられる大阪国際大学山口准教授に、子どもの交通安全対策についてご寄稿いただきました。

幼児や学童の交通事故を防ぐために

大阪国際大学 人間科学部 人間健康科学科 准教授 山口 直範

子どもの不慮の事故による死亡理由で最も多いのは、0歳の子どもの誤飲などによる窒息ですが、1～4歳、5～9歳になるといずれも交通事故が最も多くなります。

なぜ、子どもが交通事故の被害に遭ってしまうのかを発達心理学の観点で考えていきましょう。

なぜ道路に飛び出すのか？

幼児や小学生の交通事故で最も多いのは道路への「飛び出し」による事故です。子どもは感情のコントロールが苦手なため、つい衝動的な行動をとってしまうのです。例えば、道路を挟んだ状態で向こう側に母親がいると子どもはどうするでしょうか？大好きなお母さんのもとへ走りたくなるのは当然ですね。もし、その瞬間に後ろから車が迫ってきいたら…あなたが母親ならどうしますか？「あぶない！」と声をかけたくるのではないのでしょうか。しかし、これはさらに危険性を高める言葉になるかもしれません。なぜなら子どもは危ないと感じたら安全な人（場所）の方へ行こうとするからです。この場合、安全な場所はお母さんのもとに寄り添うことでしょう。つまり、危ないという声を聞いて、急いでお母さんのもとへ走り出すかもしれないのです。

このように不安を感じた時、親への接近を求める行為は乳児期から見られ、発達心理学者のエイズワースは「安全基地」と呼んでいます。「あぶない！」という言葉よりも「とまって」「ストップ」「じっとして」などの言葉の方が望ましいといえるでしょう。



中・高学年児は自転車事故に注意

自転車で活発に移動するようになれば、歩行中の事故よりも自転車乗車中の事故が多くなります。では、なぜ自転車事故が増えるのか考えてみましょう。自転車は車やバイクと同じ立派な交通参加者の一員です。しかし、自転車の運転は免許証が要らず、交通規則の試験もありません。子どもの自転車事故には様々な要因がありますが、その中の一つに他者理解の未熟さが考えられます。相手の視点に立って物事を考えて、自分の行動をコントロールすることが苦手なのです。発達心理学者のセルマンは、相手の気持を推測し理解する能力を「役割取得能力」と呼び、5段階の発達レベルがあると論じています。交通場面での役割取得能力は、車やバイクの運転者の考えを取り入れて、自分がどのように行動すべきかを判断する力ともいえます。

小学生の間は、この能力を獲得している最中なのです。運転免許証を持っている大人でも他者の行動を読み間違えて事故を起こすわけですから、子どもにとっていかに難しい課題であるのかがわかりますね。

未来ある子どもたちがある日突然、その将来を絶たれてしまうのが交通事故です。

私たち大人の力で何よりも大切な子どもの命を守っていきましょう。



【山口 直範氏 プロフィール】

臨床発達心理士、主任交通心理士

鈴鹿8時間耐久ロードレースを中心にプロのオートバイレーサーとして活躍。

第一線から引退後に大学に入学して交通心理学と発達心理学を学ぶ。

幼稚園教諭や保育士の養成校を経て、現在は大阪国際大学に勤務。

研究テーマは心理学のアプローチで交通事故の調査・分析・対策・教育など、幅広く交通問題を扱っています。近年は特に発達段階に応じた子どもの交通安全教育に取り組んでいます。「子どもの命より大切なものはない！」といつも思っています。